

2009年
12月4日
金曜日

于 康 教授（中国語学・日本語学）

2009年度于ゼミ24組、万歳！

今年度のチャペル講話は中国茶の実演だった。その内容を言語化させるためのスペースが足りないのでは、他の内容を用いてそれに代えることにした。ご理解戴きたい。

さて、2010年4月から12年間勤めた経済学部から国際学部へ移籍することになった。今年度の経済学部の基礎ゼミは私にとって経済学部の最後の基礎ゼミとなる。幸い、今年度もいいゼミ生に恵まれて、組長も副組長（正式名称はゼミ連絡員）もしっかりしているの、楽しくゼミ運営を行ってきた。

ゼミ生と話をしている中で、彼らが使っている言葉の表現が時々理解できないことがある。たとえば、クリソツ（そっくり）とか、ゲッティ（スパゲッティ）とか、ジュークコウ（塾講師）とか、ガハラ（上ヶ原キャ

ンパス）とか、タマブ（バレーボールサークル）とか、バミル（中華レストラン「バーミヤン」で食事をすること）とかだ。

また、文学部の日本語学特殊講義や大学院の授業で、「先生がうちの弟に本を――」の下線部に、「くれる」か「あげる」のどちらかを一つ選択させるアンケートを行ったら、非常に意外な結果が出てきた。「先生がうちの弟に本をあげる。」を選択した学生が少なからずいたのだ。

ある受講者は、「違和感がなくなりつつある」とまで言っていた。弟は明らかに「ウチ」の人なので、話し手と同じ縄張りを有すると考えられる。なのに、「くれる」ではなく「あげる」が選択されるのだ。つまり、兄弟がもう「ウチ」ではなく「ソト」に属し、自分と異なる縄張りを有す

るものとなってしまうたのではないかと思いますを得なかった。この現象については、要調査だが、若者たちの言葉の表現や表現の選択には、確実に変化が生じているのだろう。

このような言語現象は「日本語の乱れ」としてとらえている人もいれば、「日本語の変化」と見なしている人もいる。重要なのは、いかにして言葉が乱れまたは変化し、その背景にどのようなメカニズムが働いているのかということだ。

そこで、春学期の終わりに、『関西学院大学キャンパス用語辞書』（暫定版）を作ってみないかと、ゼミ生に提案したのだ。彼らは、言葉の感性が鋭く、流行語やスラングに非常に敏感だから。無理な提案であるにもかかわらず、ゼミ生全員は、快く引き受けてくれ、議論や修正を重ね

た上で、『関西学院大学キャンパス用語辞書』（暫定版）を完成させた。

初稿には、発音記号も付してあったが、関西弁で発音するか、共通語で発音するか、または自分の方言で発音するかについては、議論が分かれた。その結果、暫定版には、発音記号を省いた。また、彼らのありのままの感性を尊重するため、意味解釈や用例については、私の方からは一切手をつけないことにした。

『関西学院大学キャンパス用語辞典』（暫定版）を目の前にして、2009年度経済学部于ゼミ（24組）の諸君の努力に心を打たれた。その感謝の気持ちを込めて、次の言葉を諸君に贈りたい。「2009年度于ゼミ24組、万歳！」